2022/6/13
（うと Q 世話し オマケの英語教室事始縁起）書庫版

我が国の英語教育における最深部、最基底部に横たわっている根底的教育方針は何か？
明治以降、第二次世界大戦を経て迄変わることなく横たわっているもの（魔物はたまた妖怪の如きもの）は何か？
私見ながら、一言で申し上げますと
「外国に出て
「絶対に恥をかかぬ」
レベルの英語を身に着ける事」
これに尽きる気がします。
（更に現代においては「外国に出たら」はおろか「一歩自室を出たら」くらいに極限的なまでに範囲が狭められているようでもあります。もっと申せばこの傾向は英語教育以外、全ての日常分野において見受けられる共通傾向の様な気もします）
要するに我が国特有の「恥の文化」が最深部でコントロールしているのです。
最深部に横たわり続けている「魔物」「妖怪」の正体は恐らくこの「恥の文化」でしょう・是は相当に根深く且つ、それこそ「絶対的」です。
なので「正しい英語」が求められる。
或いは「正しい英語だけ」が求められる。
「寸分のミス」が許されぬ。
「ジャスピンポイントの正解が求められる」
「それ以外は英語と認めない」
「絶対に恥をかかぬは MUST」
「それをキープしたうえで次は「賞賛」と「感嘆」を狙え」
と。
此処まで脅されたら何も喋れなくなるのは当たり前です。
習う側は勿論、教える側だってビビってしまいます。
小学校から英語教育と聞いたとたん先生方がビビりまくってカリキュラムが導入される前

から抑うつ状態になったりするのも非常によくわかります。
是は偏に
「辱めを受けるくらいなら自害せよ」
と言っていた頃と同じ構造でしょう。何一つ変わっていないのです。
辱めの内容が「捕虜」から「英語」に置き換わっただけです。
辱めと言い出したのは、第二次世界大戦前は軍部でしたが、現在では国民全員の様な気がします。我が身はさておき相手には必ずそれを求める。
しかしここに混同があるような気がします。
「恥」＝「辱」
「恥をかく」＝「辱めを受ける」
本当にこれはイコールなのでしょうか？
「恥をかく」＝「馬鹿にされる」＝その最上級として「辱め」と感じてしまうだけなのではないでしょうか？
例えば
「恥をかく」＝「よくある事」＝「いちいち気にしなくていいんでないの？」
でもいいような気もします。
前者だと身動きが取れなくなり、果ては「自害に至り」ますが、後者だと気が楽になり「失敗も経験のひとつ」くらいに感じませんでしょうか？
「これはアカンやったなぁ。しゃぁない。ほなら、いっちょ、次の手、いってみまひょかぁ」
くらいに。
「ごめんチャイ。でも、しくじり先生ネタ、一個でけたわぁ。ラッキー」
くらいに。
という事で「オマケの英語教室」を始めた次第で御座います。